

## IV 保健所での取り組み



# 新型コロナウイルス感染症流行下における健康づくり

## ～行政の情報発信と健康づくりサポーター・住民の取組～

八王子市保健所 黒田 藍 壽崎 愛子 杉野 今日子

### 1.はじめに

近年、多くの研究の中で、地域活動への参加やボランティア活動を通じて、人とのつながりを持つことは、“健康”を維持する一つの要素であることが明らかになっています<sup>1)</sup>。

特に高齢者については、社会的孤立は死亡のリスクを高めることが指摘されており<sup>2)</sup>、各自治体においても通いの場をはじめ、人と人とのつながりをつくる取り組みを進めてきました。

一方で、2020年当初より流行が始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、感染拡大防止の観点から、これまで進めてきた地域活動やボランティア活動を一時中断、または縮小せざるを得ない状況となりました。それにより、特に高齢者は、外出の自粛や活動量の低下による筋力低下、孤立の課題が早期から指摘されています<sup>3)</sup>。

このような中、本市保健所には地域住民から、活動や生活が制限され、自らの健康への不安や地域の健康状態の悪化を懸念する相談が多く寄せられました。

今回、新型コロナウイルス感染症の感染予防策とともに住民の健康を守るための情報発信と、感染対策を講じながら健康づくり活動を行う本市の健康づくりサポーターの取組について紹介します。

### 2.健康づくりサポーターについて

本市では、住民が住み慣れた地域で、笑顔で、こころ豊かに、生き活きと生きがいを持って暮らせるよう、住民の方と一緒に健康づくり活動を行う「健康づくりサポーター（以下、サポーター）」を養成しています。2020年11月末現在146名のサポーターが地域で活動をしており、地域の健康づくりの輪を広げる活動に取り組んでいます。

### 3.新型コロナウイルス感染症流行下での行政からの情報発信に関する取組

#### 1) サポーターと協働した取組

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止と外出自粛等に伴う健康へのリスクを低下させるため、保健所では住民向けの情報発信を行っています。

情報発信については、図1のとおり様々なツールを活用しておりますが、サポーターを介した情報発信を行い、単なる情報発信だけでなく住民の孤立を防ぐため、住民から住民への情報発信を行い、つながりの維持も含めた取組を行ってきました。

新型コロナウイルス感染症の流行下においては、感染拡大防止の観点と住民の感染への不安から町会・自治会等で回覧板が中止となったケースがありました。外出自粛による健康への影響が大きいとされる高齢者は、紙媒体で情報を得ることが多いにも関わらず、回覧板が中止となったことは、行政からの情報発信の一つの重要なツールが活用できない状況でもありました。

図1：情報発信に用いたツール



このような中、健康への影響を不安視したサポーターから、活動中止期間中の情報発信についての相談を多く受けたため、保健所で作成したチラシをサポーターへ配布し、感染対策を講じながら各戸のポストへの投函や電話での情報発信について協力をいただきました。

以下に、配布したチラシの事例を2つ紹介します。

**事例①：健康の影響を予防するための発信**

緊急事態宣言により、自宅で過ごす時間が増える中、社会的つながりがなくなることで精神的影響と活動量低下による身体的影響を軽減するため、保健所では身近なサポーターの取組の紹介も含めた、ホームページ、チラシを作成しました（図2）。サポーターは、活動休止中のメンバーにチラシを配布したり、電話等で発信するなどの取組を行いました。チラシをみた住民から、「情報をいただいて嬉しかった」とお礼の手紙をいただいたサポーターもいました。

図2：事例①チラシ



**事例②：地域活動再開に向けた情報発信**

緊急事態宣言解除前後より、保健所には、地域活動の再開について、具体的な再開方法や感染対策に関する問い合わせが多く寄せられました。健康への影響を予防する観点からも感染対策を講じたうえで、活動を再開することは必要と考えられる一方で、感染症に対する不安は個人差があり活動再開へのハードルがあることが推測されたことから、活動の再開に向けたチェックリストを作成し（図3）、再開にあたっては参加者間で協議をしながら活動再開を決定していくことを示しました。

このチラシは、サポーターをはじめ、地域包括支援センターや町会・自治会、社会福祉協議会等へ約3700枚配布し、健康づくり活動の再開を支援しました。

多くの団体において活動再開の参考としていただきましたが、活動を再開した団体だけでなく、メンバー間で協議をした結果、感染への不安が残ることなどから、活動を再開していない団体があることも事実です。

図3：事例②チラシ

## 2) 住民主体の情報発信への協力

多くの地域活動が中止となる一方で、住民も地域の健康や住民同士のつながりを守るために、様々なアイデアを出しながら取り組んでいます。

団体の広報紙の発行の機会に、感染症対策に関する保健所へのインタビュー内容を掲載して下さった事例もありました。保健所からの情報を住民から住民へ、住民の視点でわかりやすく発信していただいた事例をご紹介します。

### 【青少年対策中山地区委員会の取組】



#### ➢ 活動内容決定の経過

自粛期間中、地域や学校行事が中止となり、**人とのつながりが減ってしまった**。広報紙を通して、**正しい感染対策を周知できればいい**と考える、子どもも高齢者も**のびのびと明るく育ちあえる風土を醸成したい**という思いから内容を決定。

#### ➢ コロナ禍での活動の工夫

対面での編集会議は1度だけとし、編集や校正は電話やメールで行った。

インタビュー協力者：広報紙「はくまん」編集委員会 小西知子さん

#### ◆ 好事例のポイント

- 子どもやお年寄りまで見てわかる広報紙を作成することで、**地域住民同士の感染症対策への意識の共有化を図ることができた**。
- 行事が中止され、人との直接的なつながりが持ちにくくなった期間も、**広報紙が人と地域を結ぶツール**になっていた。

#### ◆ 発行にあたり意識したこと

- ・子ども達を見守る様々な立場の方々（学校・保護者・中山青少対の19団体のアンケートによる地域の声）の思いに答えるよう編集した。
- ・正しい情報を発信するため、警察や学校・保健所に直接インタビューを行い原稿を作成した。
- ・子どもにもわかりやすく伝えるようにジュニア版のマンガでも取り上げた。

#### ◆ 広報紙を読んだ住民の声

- ・人の目を気にして生活していたので、広報紙を読んで気持ちが楽になった。
- ・文字をなかなか読まない子どももマンガを手取り足取り理解していた。

#### ◆ 活動の効果

- ・正しい感染対策の知識の普及、感染症への意識の共有化
- ・編集委員、青少対本部の役員、関係委員間で、世の中の動きを地域が目線でキャッチし互いに意見しあう世代間交流、視点の広がり



#### 4.新型コロナウイルス流行下でのサポーターの活動事例について

未だ、新型コロナウイルス感染症への感染のリスクはなくなる中ではありますが、健康を守るためには、新しい生活様式のもとで、それぞれができることを検討し進めていくことが求められています。

しかしながら、具体的にどのように取り組んでいったらよいのか、まだ活動が再開できない地域も多いことから、現在活動を行っているサポーターの事例について紹介します。

##### 【活動事例① 檜の木いきいきラジオ体操会】

インタビュー協力者：健康づくりサポーター 松村豊子さん



※撮影の時のみマスクをはずしました。

##### ➤ 活動経過

友人と11年前に健康のためにと活動を開始

##### ➤ 参加者

16名

##### ➤ 活動内容

- 6:00~6:30 猫の糞尿処理
- 6:30~7:00 体操
- 7:00~7:10 茶話会



##### ◆ 好事例のポイント

コロナ禍においても、**感染対策を講じながら、活動を継続**。外出自粛によって、閉じこもりがちになっていた高齢者が多くいたことから、思ったときにいつでも戻ってこられる場所として**活動継続を仲間と共に決定した**。

##### ◆ コロナ禍での活動の工夫

- ・体操、毎回歌を歌っていたが、感染のリスクを考え、歌は中止。
- ・体調不良時は無理をしない。

##### ◆ 参加メンバーの声

###### 【健康への意識の変化】

- ・自分の健康のためにと毎日来ている。
- ・みんなが元気に活動している姿を見ると自分も元気になれる。

###### 【こころの健康づくり】

- ・ここに来ると笑顔になれる。
- ・一人だと気持ちも暗くなるけれど、ここに来ただけで明るくなる。ここがあって本当に良かった。



##### ◆ 活動の効果

コロナ禍においても感染対策を講じながら活動を継続していたことは、閉じこもりになりがちになる環境下で、**短時間でも人とつながるきっかけ**になっていた。

##### 【活動事例② むささび会】

インタビュー協力者：健康づくりサポーター 花谷栄次さん



##### ➤ 活動内容

健康体操・レクリエーション

##### ➤ 活動中止期間

2020年3月末～2020年5月  
※利用施設の貸出中止と共に活動中止。  
その後、貸出再開に伴い活動再開

##### ➤ 活動中止期間中の取組

感染症に関する情報共有や活動再開に向けた意見交換を行った。

##### ◆ 好事例のポイント

活動再開に向け、コアメンバーで**情報を共有し、具体的な対策**についてチェックシートなどを用いながら検討した。参加者が**安心、安全に参加できる環境づくり**に取り組んだ。

##### ◆ 活動再開に向けた準備

- ・会議室の定員が、ソーシャルディスタンスを保てる人数に変更になったため、参加できる人数を再度確認。
- ・活動再開のチェックポイント（図3）に掲載されている内容や熱中症対策などを共有し、安全に活動ができるよう配慮した。

##### ◆ 感染予防のための工夫

- ・マスクの着用と手洗いの徹底
- ・窓を開けての換気
- ・椅子の間隔をあける
- ・受付で感染予防のためのテラシの配布、掲示
- ・自宅で検温してもらい、受付で体温チェックシートを記入



##### ◆ 活動の効果

参加者が主体となって、情報を共有し、対策を検討することで、**参加者の意思やその団体の状況にあった対策を講じることができた**。安心して参加できる環境づくりは、**参加を促進するきっかけ**となった。

## 5.活動の効果と今後の課題

新型コロナウイルス感染症の流行は、人々に脅威をもたらしただけでなく、外出自粛等により、今までのような身体活動、社会的活動ができない中で、改めて「健康」について考えるきっかけとなりました。

感染予防を第一に考えることは重要であります、それだけでは、人々の健康を守ることはできません。感染症流行下において、新しい生活様式の中でアイデアを出し、感染症対策を講じながら活動を行うことは、健康を守る上で重要だと考えます。

また、今回、サポーターや住民へのインタビューを行う中で、地域活動を行うことや活動再開に向けて住民同士が検討することは、感染予防策について改めて意識し、感染予防のための知識を習得できる環境づくりにつながっていることが推測されました。

感染症対策においては、個人だけが努力するだけでは解決せず、集団としての取組みが重要です。このような観点からも、住民同士が活動を通じて感染対策について考えることは、地域全体のヘルスリテラシーを高めるきっかけになると考えます。

## 6.終わりに

新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中で、今後も引き続き保健所、自治体として情勢も踏まえながら、正しい情報をわかりやすく、適切な時期に、対象者に有効に届く発信媒体を選択して発信していくことが求められます。

今後もサポーターや住民と協働しながら取り組んで参ります。

### 【謝辞】

本稿をまとめるにあたり、インタビューに御協力いただきました、健康づくりサポーターの皆様、青少年対策中山地区委員会の皆様、住民の皆様に御礼申し上げます。

### 【参考文献】

- 1) 細川陸也他. 健康寿命および平均寿命に関連する高齢者の生活要因の特徴. 厚生学の指標. 2020;67(7):31-39.
- 2) 斉藤 雅茂他. 健康指標との関連からみた高齢者の社会的孤立基準の検討 10年間のAGES コホートより. 日本公衆衛生雑誌. 2015;62(3):95-105.
- 3) 木村美也子他. 新型コロナウイルス感染症流行下での高齢者の生活への示唆: JAGES 研究の知見から. 日本健康開発雑誌. 2020

\* 配布したチラシの詳細については、八王子市ホームページで紹介しております。本文中の各図の横にある二次元コードからご参照ください。また、サポーターに協力をいただき、感染拡大防止に向けた普及啓発動画を作成しました。ぜひ、ご覧ください。

<https://www.city.hachioji.tokyo.jp/contents/movie/p007642.html>



# 大学体育館における換気状況及び害虫侵入に関する調査

南多摩保健所 生活環境安全課 環境衛生担当

○川寄 大志 薩埵 真二 笠倉 賢治 榎本 陽子 保坂 博之 星野 彩佳

## 1. はじめに

令和元年末中国に端を発した新型コロナウイルス感染症は日本を含めた世界中で流行し、4月には全国に緊急事態宣言が発出され、その後一時期感染拡大が収まったかのように見えた。しかし、夏前には再度感染者が増加し、増加と減少が繰り返され、11月に入り増加傾向となっている。

緊急事態宣言が明けたことを踏まえて、管内の大学より授業等を行うため、体育館を使用するにあたり、換気状況と害虫の侵入経路に関する調査依頼があった。そこで、これらの調査を行い、若干の知見が得られたので報告する。

## 2. 調査概要

- (1) 調査日時：令和2年6月15日 午前9時から10時
- (2) 調査箇所：大学体育館及び大学敷地
- (3) 調査内容：体育館内の空気の流れと気流の調査  
体育館への害虫の侵入経路調査

## 3. 調査結果と考察

- (1) 体育館内への空気の流れ及び気流の調査

今回調査した体育館の概要は図1のとおりである。なお、体育館には大学側で用意したサーキュレーターが4台設置されていた。

体育館は、ステージから見て両側側面下部に網戸が設置された窓が設けられていた。また、用具庫にも窓がある。換気装置については、排気用の換気設備（第3種換気設備）が設置されており、温度調節設備は暖房装置のみが設けられている。

まず、図2のようにサーキュレーターが設置されていたため、空気の流れと風速を測定した。風速については、10秒間の平均値をとった。測定箇所は図2のとおりである。調査時の気象条件を表1に示し、調査結果を表2に示す。

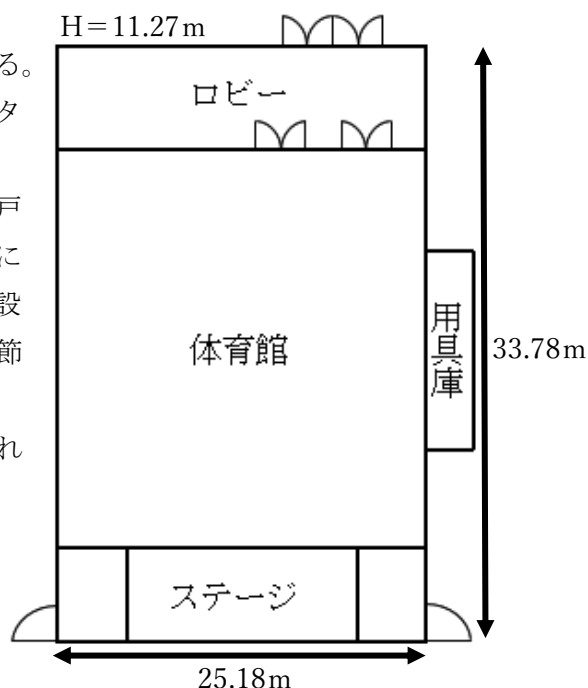


図1 体育館の概要図



表1 調査時の気象条件

	天気	気温 (°C)	風速 (m/秒)	風向き
9時	晴	27.5	2.5	東北東
10時	晴	28.2	2.5	東南東

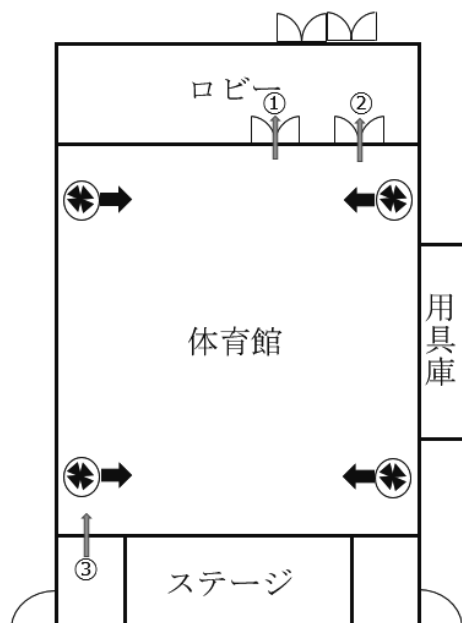


図2 測定概要

⊙➡…サーキュレーター(矢印はサーキュレーターの風向きを示す。)

➡…ドア付近の空気の流れ

\* 体育館ステージ上手側の壁面下の窓及び用具庫内の窓は開放して測定。

\* ロビー側体育館入口①のドアは両方とも開放、②のドアは片方のみ開放し測定

\* ステージ側面のドアは開放し測定

表2 測定結果

測定地点	風速 (m/秒)	気流の向き
①	0.64	体育館から外へ
②	0.77	体育館から外へ
③	0.26	外から体育館へ

次に当該体育館では、空気の流れがステージ側からロビー側へ流れていることが推測されたことから、自然の空気の流れを活かし、サーキュレーターを図3の配置にし、再度空気の流れと風速を測定した。その結果を表3に示す。

表3 測定結果

測定地点	風速 (m/秒)	気流の向き
①	2.89	体育館から外へ
②	1.93	体育館から外へ
③	0.41	外から体育館へ
④	0.23	外から体育館へ

測定機器

風速 クリモマスター(日本カノマックス製)

空気の流れ スモークテスター(ガステック製)



図3 測定概要

今回、サーキュレーターが最初に設置されていた状態と空気の流れを意識した配置方法による結果を比較すると、後者の方がより強い空気の流れを作ることが出来ていると考えられた。

空気は冷たい場所から暖かい場所へと流れる特性がある。この流れを補助するようにサーキュレーターを設置すると効果的に換気を行うことが出来る。自然の空気の流れが体育館外から中へ流入している場合には、サーキュレーターを体育館内に向けて設置することで、外気を効果的に体育館へ取り込みが出来る。一方、体育館内から体育館外へ流出している場合には、体育館外へ向けて設置することで、体育館内の空気を効果的に排出出来る。

当該大学には、今回の調査結果に基づき、体育館内の空気の流れを把握した上で、サーキュレーターの設置場所や向きを決めるように助言を行った。

## (2) 体育館への害虫の侵入経路調査

大学側より、主に蚊などの害虫が入ってくるため、窓を開放しづらいとの相談があったため体育館の防虫対策及び体育館周辺の状況調査を行った。

体育館周辺の環境は図4のとおりであった。ステージ両端の出入口ドア（図4中の①及び②）は換気のため開放されているが、網戸は設置されていなかった。また、クラブ室棟付近には日陰になっている竹やぶや樹木、小さな池がある茶室があり、蚊の発生源となっている恐れがあった。なお、体育館側面の窓に、図5のような体育館側に防鳥網、外側には防虫網（網戸）が設置されており、侵入防止策は適切に行われていると考えられた。

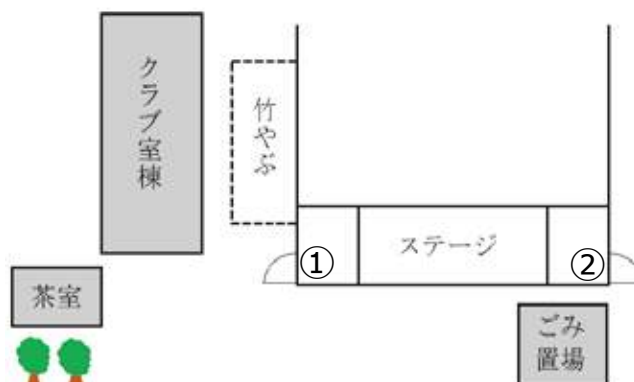


図4 体育館周辺の概略図

日本では、デングウイルスに感染した蚊に人が刺されることによってデング熱を発症する。そのため、体育館内へ蚊の侵入を防ぐ工夫や、水中等に生息する蚊の幼虫であるボウフラを退治するなどの対策が重要である。

今回、大学には、ステージ両端の出入口に防虫網を設置することを助言した。ホームセンター等で比較的安価に購入でき、大掛かりな工事をせず、設置が可能な図6のような網戸の設置



図5 体育館側面の窓の様子

も提案した。

また、蚊は高さ 15 センチ程度の雑草に潜む習性や、日陰を好む習性があるため、竹やぶが潜み場所になっている可能性があることから、雑草を定期的に草刈りすることを助言した。

さらに大学構内に水たまり、雨水ます、排水ます等がある場合、春から秋にかけて、IGR 剤を散布し、ボウフラを成虫にさせない対策も提案した。これらの内容がまとまった図 7 及び図 8 の都作成のパンフレットも配布し普及啓発した。



図 6 安価に設置が可能な網戸



図 7 蚊の発生防止対策リーフレット



図 8 施設管理者向け蚊の発生防止対策冊子

#### 4. まとめ

今回の調査は、大学側から依頼を受けて、環境衛生担当が所管している建築物衛生法に係る検査及び調査の手法を活かし、実施した。

今般の、新型コロナウイルス感染症では、予防策として換気の重要性が改めて認識されている。今回の知見を活かして、新型コロナウイルス等の感染症予防を踏まえた助言や監視指導に積極的に取り組んでいきたい。

(参考資料)

蚊の発生防止リーフレット及び施設管理者向け蚊の発生防止冊子

<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kankyo/eisei/yomimono/nezukon/mosquito.html>

感染症を媒介する蚊対策講習会（東京都健康安全研究センター 環境情報担当主催）

[http://www.tokyo-eiken.go.jp/kj\\_kankyo/mosq\\_kousyuukai/](http://www.tokyo-eiken.go.jp/kj_kankyo/mosq_kousyuukai/)

# 大学生の健康づくりネットワークを活用した 新型コロナウイルス感染症対策の推進

東京都南多摩保健所 三浦千裕 宮川真 山口陽子 河西あかね 春日里江 村井やす子

## 1 はじめに

南多摩保健所管内3市（日野市、多摩市、稲城市）には、10校の大学・短期大学がある。当保健所では、感染症の発生があった際、初動対応に遅れを生じる事案があったことを受け、平成22年度に大学の保健管理部門担当者（以下、「保健担当者」という。）と保健所職員による「感染症連絡会」を設置した。平成24年度には「大学保健管理部門ネットワーク支援事業」を立上げ、若い世代からの健康づくり対策を考える機会としてネットワーク会議の開催やメーリングリストによる情報交換・発信等を実施している。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の第一波がひと段落した6月以降、若年層への感染予防対策を意図した大学への訪問や、連絡会を活用した取組を行い効果が見られたので報告する。



ネットワーク会議の様子（令和元年度）

## 2 活動の目的

管内の大学における新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策の推進

## 3 活動内容

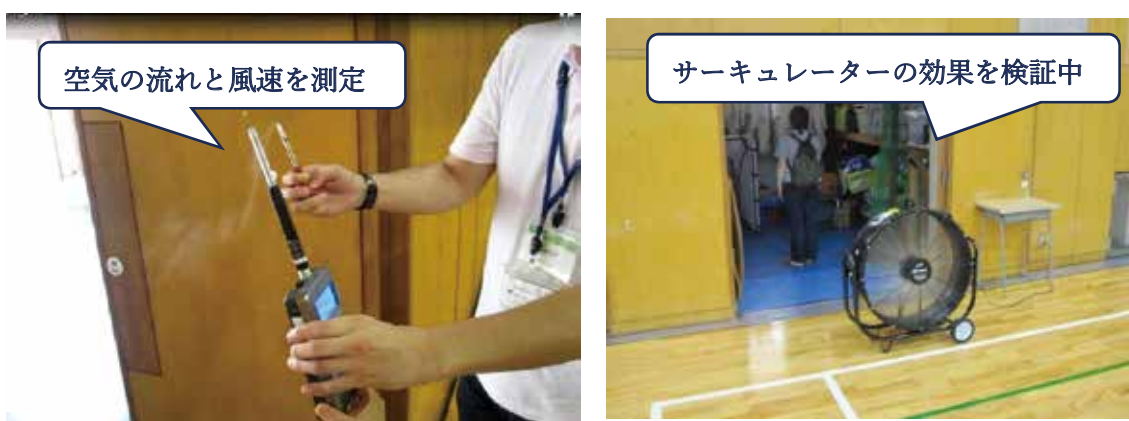
- (1) 10校へ訪問、保健担当者に事前対策及びリスクコミュニケーションの推進について確認と情報共有。
  - ア 保健担当者へ管内の発生状況の説明、感染拡大防止チェックリスト活用の勧め、学生への普及啓発の依頼
  - イ 保健担当者と校内を巡回し、予防対策、発生時対応の確認と助言
- (2) 相談のあった大学の体育館で、保健所環境衛生監視員による換気調査を実施。



食堂の様子

（令和2年6月 大学訪問時に撮影）

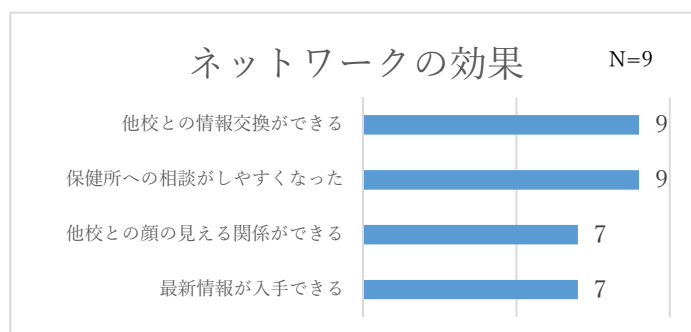
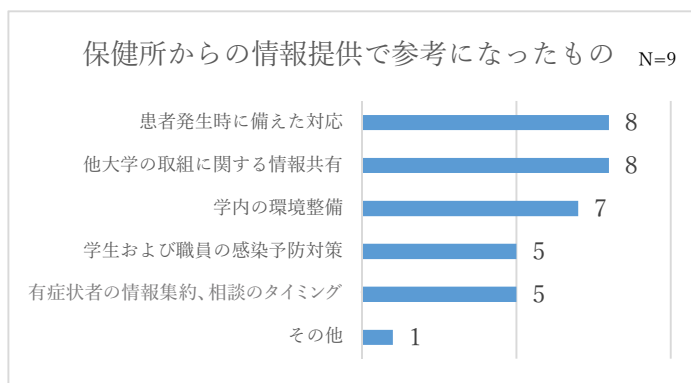
- (3) 従来からあるメーリングリストを活用し、各校の感染症予防対策の情報交換、情報整理を実施。
- (4) 連絡会で、大学間の取組の共有、換気調査の結果報告と効果的な換気方法を提案。
- (5) 保健所の HP に、積極的疫学調査への理解促進、拡大防止支援の資料を掲載。  
南多摩保健所ホームページ「新型コロナウイルス感染症に関すること」  
<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/smph/minamitama/gyoumu/covid19/index.html>
- (6) 保健所による管内大学の健康管理担当者への支援に関するアンケート調査



体育館における換気調査の様子

#### 4 保健所による管内大学の健康管理担当者への支援に関するアンケート調査結果

- (1) 10校へアンケートを配布し、10校から回答を得た（回収率100%）。内1校は大学と短期大学併設のため、回答数は9校であった。
- (2) 保健所からの情報提供で参考になったものは「他大学の取組に関する情報共有」「患者発生時に備えた対応」が8校（88.9%）、「学内の環境整備」が7校（77.8%）、「有症状者の情報集約、相談のタイミング」「学生および職員の感染予防対策」5校（55.6%）であった。



- (3) 大学が感じているネットワークの効果として「他校との情報交換ができる」「保健所への相談がしやすくなった」が9校(100%)、「他校との顔の見える関係ができる」「最新情報が入手できる」が7校(77.8%)であった。
- (4) 保健所からの情報提供を受けて、「学生の健康管理方法や入構のルール」「学生の行動記録」「体育館の換気」「校内での普及啓発」等、学内の対策として新たに取り入れた大学は8校(88.9%)あった。
- (5) 令和2年10月末時点で、8校の学生13名の新型コロナウイルス感染症の患者発生があった(集団発生なし)。

## 5 活動成果

- (1) 大学側:ネットワークを活用し、保健所や他大学からの情報が得られたことにより、各大学において感染症対策の取組が推進され、患者の早期探知、学生・保護者・職員への周知等、速やかに対応できていた。保健所が積極的疫学調査で大学に連絡をした際、自主的に接触者をリストアップしていた学校もあった。全ての大学において、学内での感染拡大は見られなかった。
- (2) 保健所側:施設内感染予防の準備状況、事前対策が把握できているため、迅速に効率的、効果的な対応ができた。

## 6 今後の計画

保健所は、感染症発生時の大学の対応状況を把握し、課題抽出、保健担当者への情報提供、担当者不在時の対応等を通し自主管理能力を向上させる支援を行う。感染症対策の推進に加えて、学生のメンタルヘルスをはじめとした多様な健康課題や健康危機発生時にも、大学が適切に対応できるよう情報提供や情報共有を行っていく。

## 7 倫理的配慮

活動の分析は個人名や法人名が特定されないよう配慮し所属長の許可を得て実施した。

### 【謝辞】

本稿をまとめるにあたり、ご協力いただきました、大学生の健康づくりネットワークメンバーの皆様に厚く御礼申し上げます。

## おわりに

保健医療福祉関係者を始め多くの皆様と積み重ねてきたフォーラムは、今年度 21 回を迎えました。経験した事のない長期戦となっている新型コロナ感染症対応の渦中にもかかわらず、現場の皆様からの貴重な経験にもとづく発表演題をいただき心より感謝申し上げます。

流行が続く中でのフォーラム誌上開催となりましたが、全ての演題が時々刻々と変化する課題に対して、現場で対応する皆様の現在進行中の試行錯誤や創意工夫が伝わる大変参考になる内容ばかりであります。

また、感染予防の視点から、集まる場所や距離に制約されないオンライン活用が我々の身近でも一挙に進んできており、これまでとは違った顔の見える連携を今後進化させる可能性を感じております。

こうした背景から、誌上開催を期に、オンライン手法なども駆使し、同じ目的に向かう関係者の間で、現在進行中の取り組みが、“点” から“線”そして、“面”へと拡がり、良い点や改善点を学び合い、効率的・効果的に対策が進む一助になればと願っております。

そうした思いも含め、今回の発表に関する質疑は、抄録集に掲載しているコミュニケーションシートの活用を試みました。是非、ご活用いただき、新たな絆を深めるきっかけにいただければ幸いです。

東京都南多摩保健所長  
山川 博之

## 第21回 南多摩保健医療圏地域保健医療福祉フォーラム抄録集

令和3年1月発行

登録番号 (2) 6

編集・発行 東京都南多摩保健所  
〒206-0025 東京都多摩市永山二丁目1番地5  
電話 042(371)7661  
ファクシ 042(375)6697  
<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/minamitama/index.html>

印刷 システム印刷株式会社  
東京都日野市高幡1012-13

